

異文化間移動を経験した子どもたちの母語保持 —中国から日本へ移動した子どもを中心に—

**Native language maintenance of children moving between cultures:
A case study of two Chinese children in Japan**

茂木 早

要旨

本稿は子どもの頃に異文化間移動を経験した人々がどのように母語を保持するのかという点を中心に考察している。子どもの頃に中国から来日した女性2名にインタビューし、その結果をライフストーリーとして分析した。母語を保持する上では、本人や家族の母語に対する認識が重要であり、日本と母国に対する客観的な認識が肯定的な影響を与えることが分かった。

キーワード：異文化間移動、母語保持、アイデンティティ、ライフストーリー

1. はじめに

近年「日本語指導を必要とする子供たち」は増加しており、こうした子どもたちへの教育問題は今後検討していかなければならない重要な課題である。ポロック・リーケン(2010:46)は、生後から18歳までの人格形成期の大半を外国で過ごすことは、子どものアイデンティティや人間関係、世界観に大きな影響を与えると指摘している。異文化間移動を経験した子どもに対し日本語を教えることだけでなく、母語保持や彼らのアイデンティティをどのように捉えるかという多角的な視点から、彼らの状況を考えていく必要がある。

本稿は異文化間移動を経験した子どもがどのように母語保持をし、その際にはどのようなサポートを必要とするのかという点を、小・中学生時代に異文化間移動を経験した2人の中国人女性へのインタビューを中心に考察した。一般化はできないが、実例を取り上げることで、今後彼らにどのようなサポートが必要なのかを検討する。

2. 異文化間移動を経験した子どもの母語保持とアイデンティティ

異文化間移動を経験する子どもにとって、母語の保持がいかに難しいことであるかについては、すでに多くの指摘がなされてきた。「移動する子どもたち」における変化は、単に空間の移動だけでなく言語的移動を含む(川上、2006:3)。そのため、母語の能力が成長段階にある時期に、母語を使用しない国に移動すると新しい言語もうまく習得できず問題が起きる。中島(2001:30)は、子どもの言葉の習得について、子どもはことばを覚えるのが早い、忘れるのも早い、ため、「新しいことばを覚えるということと覚えたことばを維持するという両面から考える必要」があるとしている。

こうした母語保持の必要性を考えると、異文化間移動を経験した子どもたちが現実においてどのように母語を保持していくのかを考察する必要がある。先行研究においては、二言語環境にいる子どもの母語に影響する要因として、入国年齢、滞在年数、母語の使用、母語保持の努力等が挙げられている(穆, 2008: 28-31)。しかし、母語保持とアイデンティティに注目した研究はさほど多くない。ロング(1998)は、移民を対象とする研究で、言語の選択と使用は個人の民族的帰属意識とアイデンティティを表す方法であると論じ、彼らがどのように祖国の言語を保持するかは、アイデンティティと深い関係があると主張している。カミンズ・中島(2011: 68-69)は、母語の否定が子どものアイデンティティを否定することになると指摘し、アイデンティティの積極的容認が母語保持のための教育にもつながると述べている。

以下では上記の検討を踏まえて、異文化間移動を経験しながらも母語を保持した外国人を対象に、自己認識の問題に焦点を当てながら分析を行う。

3. 調査方法およびインタビュー対象者について

3.1. 調査方法

本稿のインタビュー対象者はAさん、Bさんの2名である。2名とも小・中学時代に中国から来日した女性であり、インタビューした時点で日本の大学院に通っていた。調査対象者とした2人は、言語形成期後半に来日して異文化間移動を経験し、日本語と中国語の二言語併用者(バイリンガル)となった。

Aさんは2013年8月4日、10月14日、Bさんは2013年9月7日、10月31日と2回インタビューを行った。1回約1時間から1時間半の半構造化インタビューを実施した。使用言語は全て日本語であり、会話はインタビュー対象者の承諾を得てメモと録音で記録したうえ、録音データは文字起こしを行った。

以上の過程から得たインタビュー内容を、二人の人生についての語り、すなわち「ライフストーリー」として質的に分析した。ライフストーリー・インタビューは個人の人生全体またはその一部に焦点を当て、その人自身の経験から様々な変動を読み解こうとするものであり、対象者の主観やアイデンティティを重視する調査方法である(桜井, 2002)。特に「物語としての自己」はアイデンティティと強い関係性を持ち、その様相は数量的なデータからではなく、聞き手と語り手の相互作用としての語りから見出される(佐藤, 2013: 310-312)。こうしたライフストーリー・インタビューは、母語への捉え方、自分と母国の関係などに注目する本稿の目的からすると、最適の調査方法といえる。

分析方法としては、設定した分析視点を中心に文字化された全体のストーリーを分け、そこで語られている経験を基にして考察を行った。とりわけ対象者の語りと母語(または母語保持)の関係に留意しながら、その経験が持つ意味を分析した。

3.2. Aさんのプロフィール

Aさんの家族は、父親、母親、Aさんの3人で構成されている。Aさんが来日することになった理由は親の留学である。Aさんの母親は中国の大学で日本語教師をしており、日本に研修のため来日した際に日本で生活したいと考え、日本の大学院の修士課程に入学を決めた。父親とAさんは中国に残っていたが、以前から博士課程への進学を希望していた父親も日本の修士課程への留学を決意したため、Aさんとともに来日したと言う。

来日当初、Aさんの家族が在住した地域は北海道札幌市である。平成24年度「北海道の国際化の現状」に基づいてこの状況を概観してみると、在留外国人は2010年末時点で22,239人に達し、その中でも中国人が最も多い。札幌市にある北海道インターナショナルスクール、北海道朝鮮初中高級学校が主に在住外国人児童に向けての教育をしている。

Aさんは来日前、日本語を一切勉強したことがなかったため、来日当初は日本語が全く分からない状態であった。また、来日前には日本に対して特別な印象や感情はなかったようだ。小学校では取り出し教育も行われておらず、日本語に関するサポートは受けていなかったと言う。

表1 Aさんの人生年表

| 年(年齢) | 出来事 |
|------------|---------------------|
| 1988年 | Aさん中国遼寧省瀋陽で誕生 |
| 1996年(8歳) | 小学校3年生の時に来日(北海道札幌市) |
| 2001年(13歳) | 中学校へ入学 |
| 2004年(16歳) | 高校へ入学(一般入試) |
| 2007年(19歳) | 中国広東省の大学へ入学 |
| 2012年(24歳) | 日本の大学院へ入学 |

3.3. Bさんのプロフィール

Bさんの家族は、父親、母親、Bさんの3人で構成されている。Bさんの父親はもともと6年間日本に住んだ経験があり、父親の仕事の都合で、Bさんが中学生の時に母親とともに来日することになった。ただ、仕事は日本語とあまり関係がなく、両親は日本語が流暢に話せないと言う。

Bさんの家族が来日して在住したのは、神奈川県である。この地域の状況を見ると、神奈川県では積極的に外国人支援事業が行われている。現在も外国籍の県民をサポートするためのボランティアを養成する講座を開くなど、積極的な支援体制を整えている。

Bさんは来日について、家族と一緒に暮らすということから前向きに捉えていたようである。また、来日前に日本語を勉強したことはなく、日本の中学に転入する前に自宅でひらがな、カタカナを学んだ。取り出し教育や、クラスに週一回通訳がつき、授業のサポートがあったと言う。

表2 Bさんの人生年表

| 年(年齢) | 出来事 |
|------------|------------------------------|
| 1988年 | Bさん中国河北省で誕生、小学校・中学校時代を中国で過ごす |
| 2000年(12歳) | 中学校1年生の時に来日、3学期から学校へ(神奈川県) |
| 2003年(15歳) | 神奈川県の公立高校へ入学(在県外国人特別募集枠で受験) |
| 2006年(18歳) | 日本の大学へ入学(一般入試) |
| 2011年(23歳) | 日本の大学院へ入学 |

3.4. 母語保持における年齢の関係

湯川(2005)は、異文化間移動を経験する子どもの年齢が7・8歳以下の場合、母語を喪失しやすく、母語と現地の言葉の双方を使うことができる選択肢を与えることが重要であるとしている。この点からすると、異文化間移動を経験した中国人の子どもにとって、どの段階で日本に来たかが母語保持において非常に重要である。本稿のインタビュー対象者は、両方とも母語を喪失しやすい年齢を過ぎてから来日している。このことから、調査において幼年期の母語喪失を懸念せずに、母語保持の条件を検討することが可能になる。

4. 中国から移動した子どもたちと母語保持の関係—インタビューをもとに

この節ではいくつかの視点に基づいて、インタビュー対象者と母語の関係について分析する。分析視点は①日本語習得と母語の関係、②母語保持に関する本人と家族の意識、③周りの日本人または日本と母国の関係が本人の母国への考え方に与えた影響、④日本と母国に対する認識、の4つで構成される。これらの分析視点で注目するのは、母語保持と個人および家族の意識との関係である。

中島(2010: 23-28)は、言語形成期が社会的・文化的軋轢に悩まされる可能性が多い時期であり、この時期において子どもは、親の価値観や学校文化の評価観に影響を受けやすいとしている¹。このような観点からすると、分析視点①と②の視点に立ちライフストーリーを分析する意味があると考えられる。また、ポロック・リーケン(2010)は、異文化間移動がアイデンティティや価値観の形成に及ぼす影響を強調しており、とりわけ母国との関係が帰属意識に影響を与えるとしている。個人の言語行動が社会的アイデンティティ、すなわち民族集団への帰属感に強く影響されるという言語生態学の分析を考慮すると(岡崎、2006: 23)、母語保持における母国への意識(分析視点③、④)は検討に値すると考えられる。最後にこれらの分析に基づいて、本調査の目的と照らし合わせながら考察を行う。

¹ この研究で中島は、言語形成期を前半と後半に分け定義している。言語形成期前半とは、生まれてから9歳頃までの期間を示しており、言語形成期後半とはそれ以上15歳くらいまでの年齢を示している。また、言語形成期後半は現地語の習得、母語の保持において自らの意志と努力が必要であることが指摘されており、その際に学校の友達のような同年齢の仲間の影響が継承語学習への姿勢に影響を与えるとされている。

4.1. 分析観点1 日本語習得と母語の関係

4.1.1. Aさんの事例

日本語の支援は受けず自分で授業に出席しながら習得したと考えられる。自宅で両親と日本語の勉強をしたり、中国語の勉強をしたことは一切なかったという。家庭内で使用する中国語は簡単な会話のみであったため、中国語の能力が日本で生活していくうちに落ちたという。そのことに関して彼女は「中国語があまりにもできなくて、読み書きは、あの家庭によっては、私の従兄弟なんかは小さい時からお母さんがやらせてて、だからその子はできるんだけど、私はそれがなかったから読み書きができなくて。話したりするのも本当に家で使うような簡単な言葉しかできなくて、だから全然中国語が使えなくなって、それで親が心配して大学は中国に行ったんです。」と答えてくれた。彼女自身は日本の大学への進学を考えていたため、中国語能力に関してはそこまで気にしていなかった。そのため日本語が伸びるにつれて中国語を少しずつ喪失していったようであった。

4.1.2. Bさんの事例

Bさんの場合、両親が日本語を話せなかったため、日本語の支援を受けつつ日本語を習得していったようである。中国語に関しては、中国にいる友人や祖父と連絡を取りながら維持していたようだ。そのことに関して「最初中学校、高校まではその時までパソコンがない時で、手紙を書いて連絡を取ったり、電話カードとか国際のカードを使ってお祖父ちゃんに電話したり、友達に連絡したりしてて、大学に入ると結構もうネットでチャットしたりとかして、手紙は書かなくなった」と語ってくれた。

彼女は自分の日本語がネイティブに近いという。しかし中国語能力に関しては、日常会話はネイティブに近いが、書く能力は小学生の作文レベルに留まっていると感じているようだ。彼女の語りの中で印象的だったことは日記の話である。「中学校で日記をつけるようにしてて、それも日本語で書いてたから最初は本当に片言の日本語だったんだけど、中国語でも書いたりしてて、途中から中国語で書けなくなって日本語のほうがなんだろうスムーズに書けるっていうかそっちのほうが楽。」と答えてくれた。その時の心境については嬉しかったと語ってくれた。日常生活の中では中国語で書くことは必要なかったため、年齢が幼かったからということもあるが、中国語が書けなくなったことに関してはあまり気にならなかったと言う。

4.1.3. 分析

Aさん、Bさんともに日本語の能力が高まるにつれて中国語の能力は次第に衰えていったという。平井（2003：217-219）は外国語が話せるようになる速度に個人差はあるが、次第に母語の能力は失われていくことを指摘している。これはAさん、Bさんともに当てはまる現象であると言えるだろう。しかし、二人の違うところは、Bさんの場合、友人と

の手紙交換や祖父との電話等を通して、中国語を頻繁に使っていたため、話すことに関しては衰えず維持することができたのだと考えられる。

4.2. 分析観点2 母語保持に関する本人と家族の意識

4.2.1. Aさんの事例

前述した通り、中国語を意識的に勉強することはなく、中国語より日本語ができるようになってきたことに関しても特に何も感じなかったと言う。大学生になるまでは毎年中国に帰っていたというがAさんは自分自身の中国語のレベルが落ちたという認識が特になかったと言う。そのことに関して「言葉って相手ができないと自分もそれに合わせるじゃん。だから、小学生とだってコミュニケーション取れるじゃん。できる人が小学生に合わせてるから。私はその合わせられるほうだから、実感はなかなかしづらくて。」と語ってくれた。

本人の母語への認識に対し、両親は母語ができないことについて心配したと言う。そのため、心配したAさんの両親が大学進学の際、中国の大学に進学するよう勧め、大学は帰国することになったようである。彼女が進学した大学は、華僑が建てた大学だったため帰国子女枠があり、そこに入学を決めたと言う。大学入学前に2、3ヶ月大学の附属機関で中国語を勉強し入学したが、発音はネイティブの発音が残っていたため最初の2ヶ月で急速に上達したという。そのことを彼女はこのように語ってくれた。「私の場合本当にその、中国人の小学何年生が勉強するって感じだから勉強した分だけ伸びる。語彙とかを詰め込んだだけ伸びるから、(省略)そういう意味でそんなに大変という感じではない。」彼女の場合、意識的に母語を保持したというよりは、家庭で使っていた言葉を大学進学の際に補強する形で伸ばしたようである。本人に母語の能力が落ちたという認識がなかったため、両親の意識がきっかけとなり、母語への認識が高まったと言えるだろう。

4.2.2. Bさんの事例

Bさんの場合、前述したように家族や友人とのコミュニケーションにより会話力はネイティブ並みの力を維持してきた。この背景には本人の母国への強い気持ちがあったようにも感じた。日本の大学、そして大学院に進学し、現在博士課程在学中のBさんは将来的に中国に帰国する予定だと言う。中国に戻りたいという気持ちは幼い頃から変わっていないと彼女は語ってくれた。そんな彼女の中国への思いが垣間見えたのは以下の語りだった。「私の場合日本に来た時から絶対中国に帰るっていう、すごいもう、今でもあるんだけど、その気持ちがずっとあって、だから大学に行っても、院に行っても、いずれは帰る、日本にずっといることはないなって思ってたから。(省略)もともとおじいちゃんと仲良かったから、毎週必ず週1回は電話、今でも週末に電話してて、でないとか向こうからかかってくるくらいで。(省略)家庭にもよるんだけど、親がもうずっと日本にいて、中国にいて

帰らないような雰囲気があればたぶん子どもも日本に残るんだっていうような気持ちもあるんだけど、(省略) いずれは帰るって感じの雰囲気もあったから、私もすごいいずれは帰るんだっていうのはあった。」と帰国するということを心の支えにしているという印象を受けた。中国の家族とのつながり、そして両親の意識が彼女の母国への思い、そして帰国への思いを強くしたようだ。

4.2.3. 分析

母語保持の認識に関しては A さん、B さんは対照的であると感じた。本人の意識もさることながら、両親が子どもの母語についてどのように捉えるかによって母語を保持するか否かに大きな影響を与えていると考えられる。それが明らかに表れているのは A さんである。A さんの場合、本人に母語の能力の低下に関する意識がなかったため、両親の働きかけが母語保持への大きなきっかけとなった。B さんの場合は、家族との関係、両親の考え方が母語保持へのモチベーションにつながったようだ。本人が母語保持に関してどのように捉えるかという視点で見ると、二人は対照的だが、両親の考え方が影響しているという点では両者は共通している。

4.3. 分析観点 3 周りの日本人または日本と母国の関係が本人の母国への考え方に与えた影響

4.3.1. A さんの事例

日中両国の間で度々政治問題が噴出することがあるが、そのことに関し A さんは「生活に影響はでないけど、そういうのは注目っていうか関心は持ってるから、何かあるたびに思うところがあるのはある。でもそれを特にアウトプットはしてない。する必要もないし。」と答えた。日本と中国両方の国で育ってきた彼女にとって答えに困る質問はどっちの国が好きかという質問だと言う。中国でそう聞かれた際には中国語ができないふりをしたと語ってくれた。相手が特に答えを求めていないだろうと彼女自身感じており、自分なりの考えを持って対応しているのだろう。中国にいた時の彼女は内気で社交的ではなかったという。しかし、日本人が周りにいる環境で生きていくために無意識のうちに自分の性格を変えたと思うと教えてくれた。「私ずっとマイノリティだったから、自分で入っていかないと自然に輪に入れるわけじゃないから、どうしてもポジティブにならざるを得ないっていうのはある。」とその時のことをこう語ってくれた。

4.3.2. B さんの事例

2005 年に中国で起きた反日デモの際の印象をこのように語ってくれた。「まだ高校生だったし、すごいどうしたらいいのかわからなくて、ある日、政治経済の授業でその先生の授業を受けて、すごい中国の悪いことを言ったりして、その時はすごい傷つけられた

ね。(省略) 教師と学生っていうのがあったから反抗できなかった。それはやっぱり日本社会に外国人としているから、そこをどうこうするのはできない部分もあると思うし、その時はすごい自分の中では葛藤があったし」と語ってくれた。当時は年齢が若かったこともあり、自分の中で消化できず悩む部分が多かったと言う。しかし、現在は客観的に捉えることができるようになり、当時のように悩むことはなくなったという。日本人との関係や日本との政治的関係が母国に対する考え方を変えたということはなかったようだが、お互いの国がどのようにお互いを捉えてそれに関して自分がどう反応するのかということに関しては冷静に考えるようにしている印象を受けた。逆に中国で日本のことが悪く言われた場合はその時は、日本のことを悪く言わないでほしいと思うだろうとも語ってくれた。

4.3.3. 分析

Aさん、Bさんとともに母国のことを常に意識しながら、生活しているように感じた。そして何かトラブルが起きた際に冷静に対応する術を身に付けてきたように見えた。Aさんの場合は、日本人や日本との関係が母国の考え方に影響しているというよりは、彼女のバックグラウンドそのものが彼女の考え方や生き方を支えているようである。また、Bさんにとっては、母国は中国であるが、日本で教育を受け、日本で育ってきたということが彼女のアイデンティティに大きく影響を与えているのだろうということがインタビューを通じて分かった。

4.4. 分析観点4 日本と母国に対する認識

4.4.1. Aさんの事例

彼女の場合、来日してから日本を受け入れるようになり、大学も当然日本で進学すると考えていたようである。だからこそ「私も日本に長くて、感覚はたぶん日本人と似てたんだけど、(省略) 本当に同じ部屋だから最初はちょっと慣れなかったんだけど」と、中国の大学に進学してから自分の日本人的感觉を認識したと言う。また、日本で中国のことを聞かれるより中国で日本のことを聞かれたことが多かったと回想し、それが日本について改めて認識する機会になったようである。

母国に対しての認識は、来日した時、中国に戻った時、現在で大きな差はないようだ。「どこにいても中国に関してはずっと関心があるわけだから、その急に変わったりっていうのはなくて。ずっと見てきたものだから。」彼女は中国の大学卒業後、日本の大学院に進学した。大学のときは法学と英文学のダブルメジャーだったが、専門分野として大学の時とは違う中国に関する専攻を選んだという。その理由として「割と関心のあった分野ではあるし、自然にかな。」と語ってくれた。彼女にとって母国とは新しく認識するものではなく、常に関心のある対象であり、無意識のうちに存在するものなのであろう。大学の頃中国に帰国したことにしても、本人の意図ではなかったが、とてもよかったと感じている

そうだ。中国語、日本語に関しては、今は周囲に日本人が多いため日本語を話すほうが楽だが、両言語、好きなほうを話せるときが一番楽なため、同じ境遇の子がいるととても楽だと言う。

4.4.2. Bさんの事例

Bさんは自分と母国について客観的に分析し、捉えている様な印象があった。来日した当初、彼女には日本と中国の文化や習慣の差を感じ驚いたことはあったというが、彼女曰く「ありのままの日本を受け入れてきた。」ということだ。当時は中国がどのような国なのか、日本がどのような国なのかと頭の中で考えたことはなかったようだ。しかし、日本で教育を受けるにつれて、自分は中国人的な考え方をしていたと感じていたが、逆に日本人に近い自分がいるのではないかと認識するようになったと言う。彼女は日本を「第二の故郷」「教育を受けてきた場所」と表現している。友人から「日本人じゃん」と言われると今までは抵抗感があったという。しかし、今はそれが自分だと受け入れている。自分が「半分日本人」であるのはしょうがない、当たり前のことであると客観的に捉えられるようになったようだ。彼女は言語についてもこのように答えている。「中国語はやっぱり自分がどういう人なのか、どこの人なのかを証明できるもの。」そして自身の日本語については「日本を知っている日本語」と語ってくれた。彼女にとって中国は彼女が彼女として存在する上で最も大切な基盤になっているようだった。日本で教育を受け、日本人に近い感覚を持っていると自覚しながらも、それでも自分のルーツである中国があったからこそ今の自分がいると感じているようだ。

4.4.3. 分析

AさんとBさんの語りで共通しているのは、長い日本経験から自分が日本人の感覚に近いことを認識していながらも、母国である中国に対しては否定的な認識をしていなかったことである。二人の母国との距離の取り方は違ったが、一步離れた見地から中国を捉えようとしているように見える。日本と母国を客観的に認識することは、対象者の母語保持の直接的原因ではないものの、間接的には両言語の維持に肯定的な影響を与えたと考えられる。

4.5. 考察

分析視点①では、結果的に母語が保持された場合でも、日本語習得により母語が衰えていったことを確認した。これは母語保持が必ずしも母語の継続的維持を前提としないことを意味する。分析視点②では、母語保持に関する本人または家族の意識の重要性を確認することができた。特に母語保持のための支援が不足している状況では、家族の直接的な支援または両親の母語に対する積極的な姿勢が、母語保持に肯定的な影響を与えたとと言える。日本と母国への認識を検討した③、④の分析視点からは、異文化圏での長い生活が対象者

の両国に対する認識に影響を与えたが、異文化における暮らしの中で自分を客観的に捉えることが、母語保持の間接的なモチベーションになったことが分析できた。

以上のことから、母語保持のための支援が難しい状況の中でも母語保持は可能であり、そこには本人と家族の母語に対する認識が大きな影響を与えるということが分かった。また、日本と母国に対する客観的認識は、母語保持に肯定的な影響を与えられることも確認できた。

5. おわりに

本稿では、異文化間移動を経験した子どもたちの教育について主に母語に注目し、彼らがどのように母語を保持したのかについて実例をもとに考察した。異文化間移動を経験した子どもたちにとって、母語をどう考えるかは非常にセンシティブで重要な問題である。外国人児童は日本国籍を持っている子どもたちと同じく教育を受ける権利があるが、言葉の壁があっては同等の権利があるとは言えないだろう。その意味では、母語支援を政府の政策として導入した方が良いと考えられる。

しかし本稿の調査結果からすると、積極的な支援が難しい場合、母語や文化を周囲が肯定的に受け入れ、子どもたちが母語を使うことについてプラスに考えられるような環境を作ってあげることが重要であると言える。異文化間移動を経験した子どもたちの家族が、母語の重要性を認識することから始める必要がある。また、子どもたちと両親を含むその家族、そして周囲の人々が母語の重要性を認識した上で、子どもたちの存在を肯定的に受け止め、ともに社会で生きていく仲間として歩み寄る努力が必要であろう。

注記：本稿は2014年1月に提出した修士論文を加筆修正したものである。

参考文献

- 岡崎敏雄(2006)「言語生態学における心理社会両生態領域間の相互交渉的關係—言語政策の基礎としての、『巨視的モデル』の生態学的評価」『筑波大学地域研究』27、pp.17-33
- カミンズ, ジム著/中島和子訳著(2011)『言語マイノリティを支える教育』慶應義塾大学出版会
- 川上郁雄(2006)『「移動する子どもたち」と日本語教育—日本語を母語としない子どもへのこ
とばの教育を考える』明石書店
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 佐藤正則(2013)「留学経験の意味と自己実現についての考察—元留学生のライフストーリー
から」『言語文化教育研究』11、pp.308-327
- 中島和子(2001)『バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること』アルク

異文化間移動を経験した子どもたちの母語保持
—中国から日本へ移動した子どもを中心に—

- 中島知子 (2010) 『マルチリンガル教育への招待—言語資源としての外国人・日本人年少者』
ひつじ書房
- ポロック, デビット・C&ルース=ヴァン・リーケン著/嘉納もも・日部八重子訳 (2010) 『サー
ドカルチャーキッズ 多文化で生きる子どもたち』スリーエーネットワーク
- 平井清子 (2003) 「言語喪失・日本で起こっている現象から」JACET バイリンガリズム研究会
編『日本のバイリンガル教育—学校の事例から学ぶ』三修社、pp.213-226
- 穆紅 (ム・ホン) (2008) 「二言語環境下の中国人児童生徒の母語保持要因：母語の認知面に注
目して」『母語・継承語・バイリンガル教育研究』4、pp.27-47
- 湯川笑子 (2005) 「バイリンガルの言語喪失を語るための基礎知識」『母語・継承語・バイリン
ガル教育研究』第1号、pp.1-24
- ロング, ダニエル (1998) 「日本における言語接触とバイリンガリズム—アイデンティティと
言語使用」『日本語学』17 卷 11 号、pp.108-117

参考 URL

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tsk/genjoh.pdf> 「北海道の国際化の現状 (平成 24 年 3 月
公表)」北海道総合政策部知事室国際課 (2013.12.1)

(もてぎ さき 言語社会研究科修士課程修了生)